岡山大学教育実践総合センター紀要，第3巻（2003），39-46

原　著

障害者の自立を目指した造形美術活動支援

上田　久利（岡山大学教育学部）

本研究は，障害ある人の造形美術活動支援を通して，障害者が生きがいを持ち，自立できることを目指している。その手段として，各種ワークショップを開催するために，絵画，彫刻，書道など多様な分野の人材を結集し，ふんだんな材料を提供し，ワークショップを行う。障害がある，なしにかかわらず，参加できる新しい障害者芸術の展開を図る。障害者の造形美術活動を推し進めるためにボランティア組織を確立し，造形美術活動を通して，ノーマライゼーションを推進する。

キーワード：ワークショップ，ボランティア，造形美術活動，障害者の自立，ノーマライゼーション

Ⅰ．はじめに

今，日本は福祉社会として大きく変わろうとしている。福祉施設も各地にでき，障害者のおかれた環境は充実しつつあるように見える。しかし，障害者が社会において置かれた状況は非常に厳しい。施設がいくらできたとしても障害者が置かれた環境が充実しなければ，没個性的，管理的入れ物でしかない。障害者が生き生きと「生きがい」をもち，障害のある，「そのまま」で，「ありのまま」，「存在そのもの」を認められる成熟した社会が待たれる。

障害がネガティブなものでなく，個性としてとらえられること，また，造形美術活動支援を通して，ノーマライゼーションの考え方[1]を進めたいと研究を始めた。医療や福祉の観点でなく，表現活動を通して捉えることによって「障害」が個性として捉えられる。「障害」は障害者にあるのでなく，偏見が人と人のつながりを阻害する。

障害者と社会を繋ぐ造形活動はクリエイティブな社会を作る。障害のある人たちの社会的イメージが高められ，障害のある人たちが，人としての誇りを持ち，彼ら自身の力で生活できること，造形作品の制作を通し自己実現できることが望まれる。またそこに関わるボランティアも障害者と寄り添うことで，共に成長することがこの研究の目的である。

社会には，物が満ち溢れ，豊かさを謳歌している。しかし，物質的な豊かさに反して人々は孤独となり，不登校，閉じこもりなどの状態の人，また精神を病む人もかつてないほどに増加している。社会全体が閉塞感で一杯になっている中で，障害者の創り出すてらいのない，「命の輝き」を持った作品に出会うとき，障害者の個性や，作品の持つエネルギーに気付く。障害者たちの作品制作の場を作ることにより，そうな笑顔や，生き生きと飛び跳ね体で表す姿はサポーターにとっても「喜び」となる。

「障害者の造形美術活動支援」を教員養成の場で展開するための研究である。

障害者の造形活動を研究する事は，健常者の造形活動も深められ，一人一人を大切にする教育を進める事に繋がる。視点を障害者に置く事により，すべての人に極めて細やかな配慮が出来るものである。美術の教科専門研究と教育指導法の研究が教育実践を通し，総合的な教育研究となる。ワークショップで積み重ねられた，実践事例は困難な教育現場においても役立つ。また組織を運営したり，ボランティア組織をまとめたりする能力は，教育の場のみならずすべての領域に通じ，必要なことである。

筆者が関わりを持った２００１年度から２年度の活動を通し，障害者の造形美術活動支援の進め方，あり方，意義について述べる。

1.研究の進め方

障害のある人達の作品は健常者と常に比較され，多くの場合，上手いか，下手か，技術が問題視される。作品において技術は確かに大きな要素ではあるが，作品を成り立たせる絶対条件ではない。技術ではないとするならば何か，多くの人たちは，その事はよくよく理解しているし，一番作品を成立させる大切な事と考えている。いみじくも，2001年度行った障害者支援活動果の展覧会の評価として，山陽新聞１面コラムに「伝統工芸の技術と，障害者たちの制作した作品の情熱が現代の閉塞感を打ち破る。」[2]と記載された。この事により，障害者支援活動に携わる人はもちろん，作品を制作した障害者が自信と誇りを持ち，「生きる力」を得た。またこのような活動に携わり，障害者がだんだん変化しだす状況に出会うとサポーターも力が湧く。障害者の楽し

「生きる力」や「喜び」を求めて，障害者の制作の場を設け，どのような題材を設定するかを研究する。

障害者の制作の場はワークショップとし，ワークショップ研究をする。筆者は彫刻制作が専門なので，彫刻，特に粘土を扱うワークショップを研究し，題材設定，指導者養成について研究する。美術の教員を養成しているが，美術の専門性を生かし，視点を障害者に置く事で，いろいろな配慮の出来る教員養成に繋ぐことができる。

このようなワークショップ研究や，ワークショップの指導者養成だけでなく，ワークショップを支えるボランティアもこのような活動では重要な要素であり，欠かせない。活動を支えるボランティアの養成は教員養成の場では必要不可欠であり，ボランティアについての啓蒙の場を設けることは必須である。そして専門性を生かしたワークショップ研究，ワークショップの指導者養成，障害者支援を支えるボランティア養成，この３点を進めていくため，筆者が関わるボランティア組織，ハート・アート・岡山（旧エイブルアート・フォーラム岡山実行委員会）[3] の実践活動と平行して研究する。

2.障害者の造形活動の定義

障害者の美術活動は「アウトサイダー・アート」「アール・ブリュット」という言葉で諸外国では言われることが多い。1993 年ロサンゼルス・カウンティー・ミュージアムから東京世田谷美術館に巡回した障害者の美術展，「パラレル・ビジョン，20 世紀美術とアウトサイダー・アート」は，新鮮な感動を与え，「アウトサイダー・アート」が知られるようになった。

また画家のジャン・デュビュッフェが名づけた「アール・ブリュット」が知られているが，障害者の美術はあまりにも「アウトサイダー」でしかない。ジャン・デュビュッフェが名づけた「生(なま)の芸術」が，いかにも障害者の純粋な表現を表している。日本においては「エイブル・アート」が 1995 年に生まれた。障害を持つ人の可能性を見つけ，広げるために展覧会が開かれた。引き続き 1996 年，大阪で開かれ，1997 年東京では「魂の対話～エイブル・アート '97・東京展」が開催され反響を呼んだ。1999 年にも「この元気になる～エイブル・アート '99」が開催され「エイブル・アート」が市民権を得つつある。

この「エイブル・アート」は播磨靖夫氏が作った造語で，障害者の美術といった概念にとどまらず，「人間が人間らしく，障害者がありのままで認められ」成長する可能性の芸術と捉える。この理念は筆者が障害者に対しての造形活動支援とも合致し，大いに学び，取り入れるべきものである。造形活動支援のあり方として以下のように考える。

3.研究の目的

１）　障害者の「ありのまま」，「存在そのもの」，を認め，受容する。

個人と個人の関係を大切にし，多様な価値を認める。障害者，介助が必要な人達の自己決定を大切にし，「表現」と向き合い，作品制作の手助けをする。作品制作から自信や誇りを取り戻し，障害者自身が自分の価値を見出す。

２）　障害者と社会の垣根を取り除く

障害者自身や，彼らの作品をとおし人間と人間，人間と社会のかかわりから，質的な変化，互いの個性を認め合う豊かな関係を作る。またその事を通して，社会的な貢献ができる。

３）　ワークショップの開催

ワークショップに対して少しずつ理解がなされている。体験学習としてのワークショップは活動経験のない，障害のある人もない人も，活動を通して世代や障害も超え，色々な人と多様なコミュニケーションができる。このような，誰でも参加できるワークショップを開催する。ワークショップでは造形美術活動を行い作品制作し，作品制作により自信，生きがいを見出す。作品は芸術作品を目指し，ワークショップの質的向上を目指す。

４）　ボランティアの組織化

色々なワークショップや展覧会，また実践活動を行うためには多くのボランティアが必要となる。目標を達成するためにスタッフはもちろん，アートボランティアが重要である。組織が機能的に活動するための組織化を図る。

５）　展覧会の開催

ワークショップで制作された作品や，障害者から募集した作品の展覧会を行い，障害者の自立への手助けを行う。また社会にたいして障害者の造形作品のもつエネルギーを伝える。障害を福祉の面からとらえるにとどまらず，芸術にまで高める。

６）　障害者の作品の紹介

展覧会で作品を発表するだけでなく，作品集や絵葉書など製作し障害者支援の啓蒙活動を行う。そして障害者の制作した作品の持つエネルギーを伝える。作品を通して地域社会と繋げる。作品を通し，障害者の自立に繋げる。

７）　障害者支援を支える人材育成

ボランティアに参加し，障害者支援の活動に積極的にかかわり，ワークショップの企画，実践ができる人材育成をする。指導者養成の研究を行う。

Ⅱ．2001年度の活動

2000年12月の「障害ある人達のアート・サポーター入門講座」－制作現場での指導者育成を目的にしたワークショップ形式の研究会－[4]開催を受け，さらに活動を発展させ，豊かな作品作りと，人材育成をめざし，エイブルアート・フォーラム岡山実行委員会の行事として2001年度は3つのワークショップと，そのワークショップにおける作品と，障害者施設から募集した作品の展覧会を開催した。展覧会の案内パンフレットの製作(図Ⅰ)は，障害のある人たちの作品制作と，作品のエネルギーを前面に打ち出したものとなった。

1.ワークショップⅠ「書」

2001年8月11日，ベル学園高校体育館にて「書」のワークショップを山本和弘氏のリードで開催した。「風のように」をテーマに自由に伸びやかに自己を解放し，書作に取り組んだ。

書作で大切な紙と筆は，越前和紙の全紙を提供してくれる方があり，最高の品質の大きな紙を思い切り使い，筆は特注の箒のような大きなもので，経験した事

図1　エイブルアート・フォーラム岡山2001
案内パンプレット

のない世界を体験した。既成概念を打ち破るような大きな筆に参加者たちは大いに驚き，新しい経験をした。また越前和紙の良さがどんなものか理解できないが良いものを使う事は気持ちの良いものである。

和紙に書作を行う前に，紙に絵具でイメージの趣くまま色づけし，そのイメージに触発されて和紙に書作を行い，心一杯楽しんだ。(図2)

参加者1人に2人ずつボランティアが付き，ボランティアは絵具の用意，紙の準備などにとどまらず，制作の相談や紙の着色を行い，障害者とボランティアの共同制作（コラボレーション）とした。

図2　「書道」のワークショップ

2.ワークショップⅡ「粘土」

8月30，31日，夏休みの終わり，教育学部美術教室において「粘土」によるワークショップを行った。「風のように，鳥のように」をテーマにテラコッタ制作をした。書作とコンセプトは同じで，風のように自由で，羽ばたいてほしいと願いを込めた。また，材料の粘土はふんだんに提供することもコンセプトのひとつである。

参加者は粘土制作が初めての人が多かったが，自由に心いっぱい大きな作品を制作した。用意した粘土300ｋｇは90ｋｇを残すのみであった。作品はテラッコッタなので粘土は中空にしなければならない。抜き出した粘土は残った粘土９０ｋｇの半分程度占めた。一人20ｋｇ近く使い制作した彼らのエネルギーの凄まじさが理解できる。この粘土を中空にする粘土抜きの作業が理解できず，作品が壊れると不安に思った参加者に対する説得など，ワークショップで気付かされた事が多かった。

また作品のイメージ世界は自由で独創性に富む。風を切って羽ばたくトラック，ぶどうの房についた翼，巣篭もりして卵を抱く鳩，どの参加者も衒いのない表現をした。彼らの作品は技術を越えた世界を教えてくれる。作品制作をする上で大切なことを，支える側の者たちが学ぶ。

3.ワークショップⅢ「絵画」

9月29日，月末の土曜日，岡山養護学校のプレイルーム，美術教室にて「絵画」のワークショップを谷本雄太，倉岡信吾両氏のリードのもと，作品作りが行った。

天井から吊るした厚紙で作った幾何形体に着色する作業と，３m×４m の大きなキャンバスに天井から吊るしたブランコに乗り絵を描く，絵具を流す，いや，絵具をぶつけると言った方があっているようなワークショップであった。

天井からつるした厚紙の幾何形の着色は，くるくる回るので最初はやりにくかったが，だんだん慣れ楽しむ事ができた。幾何形体の色々な形に触れ，立体を経験していくことは量に対しての意識の開発に繋がった。また天井からつるしたブランコで絵具をぶつけ，流す事で絵具を楽しむ
事を経験し，多くの人たちとのコミュニケーションの必要性に気付く。参加者同士によるコラボレーションは互いを認め合い，互いに助け合う共生社会の縮図あった。

図3　2001年度エイブルアート・フォーラム岡山
実行委員会案内パンフレット

4.2001年度の作品展

2001 年度に行ったワークショップの作品と岡山県下の障害者施設，作業所，学校また個人に募集した作品の展覧会を１２月に「エイブルアート・フォーラム岡山2001」展として開催した。会期中会場を訪れた人たちが参加して完成していく作品，また手で触って鑑賞する彫刻作品のコーナー，会期中の会場ワークショップ，ギャラリートークなど行った。

会期中の鑑賞者は障害者の作品のエネルギーを肌で感じ，技術を越えた世界を伝えることができた。同時期に開催されていた油絵展，書道展の作家たちからも高い評価を得た。また新聞の紹介記事も障害者にとって大いに自信を与えた。

Ⅲ．2002年度の活動（2002年10月現在）

2001年度に行った3回のワークショップや展覧会などの活動を反省し，2002年度は一歩発展した活動を計画した。また NPO 法人化を目指した活動を展開しつつ，エイブルアート・フォーラム岡山から名称変更し，ハート・アート・岡山を発足した。

障害のある人もない人も造形活動に参加し，楽しみながら作品を制作する。それらの活動を支えるボランティアも楽しみながら参加することが大切で，互いの考え，想いなどを理解し，質の高い創作活動となるよう計画する。

良い材料をできる限り多く提供し，一人一人にボランティアが付いたワークショップを提供していく。このようなコンセプトのもと，2002年度は「書」「染色」「粘土」「現代アート」のワークショップを行い，ワークショップの作品を展覧会で発表した。また障害者がある創作活動をしている作家のワークショップを開催する。

図4　　2002年度ハート・アート・岡山
案内パンフレット

1.ワークショップⅠ「染色」

2002年7月30・31日の2日，本格的染色を障害者が楽しむことを目指し，岡山工業高校デザイン科の協力のもと，デザイン室を借り，大作に挑んだ。

ワークショップリーダーとして染色家，本行奎晴氏が始めてワークショップに取り組んだ。氏は聴覚障害があり，何時も要約筆記が付いてコミュニケーションをとっている。障害をもちつつも指導者として立つことの意味は大きい。参加者，ボランティアそれぞれに勇気と力を与える。氏の誠意が会場を動かし，夏の熱気もエネルギーに変えた。

ワークショップは，幅1m，長さ10mの布が2本用意し，染色の専門的な染料を使い，1人分幅1mを，障害者が思い切り描いた。誰も染色を経験したことがなかったが，それぞれの思いを作品に込め，制作した。

制作では，工業高校デザイン科の学生ボランティアたちの協力が大きかった。障害者にボランティアが協力して本格的染色にチャレンジした。染料の定着など薬品を使うところはスタッフが行い，水洗いの場面はボランティア，参加者が協力し，簡易プールで行った。全身を使って作業し，いつの間にかボランティアも参加者もプールに入って，水洗いを行った。歓声が上がり，夏の暑さを忘れる一瞬であった。(図5)

このワークショップで出来上がった作品は自分が描いた1m分ずつ縫製され展覧会場に展示された。

図5　「染色」ワークショップ

2.ワークショップⅡ「粘土」

2002年8月30，31日，昨年に引き続き「粘土」のワークショップを岡山大学で行った。8月の終わり2日間，今年は筆者のゼミ生の大学院生2人が担当した。2人とも障害者のアートサポートについて研究している。教育実習は経験しているが，新たな経験であり，経験を積み重ねる事が大事である。

昨年は筆者がワークショップを行い，続いて学生たちが継承していくことを願っていた。障害者の造形活動に触れ，指導者となっていく事は大きな喜びである。今回のワークショップは「種，実」をテーマとし，心の中の思いや夢，希望を種と表現し，「心の種を育てよう」と取り組んだ。今年は6歳から21歳と年齢の幅があり，テーマの理解，モチーフの選択に問題があった。造形的な果物や野菜に絞るべきであったが，学生の意思を尊重した。小さいもの柔らかいもの(胡桃やキウイ)は押しつぶされたり，粘土に埋もれてしまった。ワークショップの研究は実践を繰り返しながら学ぶので，これらのことは大いに勉強となった。

図5の作品は高機能自閉症，M君が，テーマの「種」を小さな「粒」のイメージに連想し，「卵」をたくさん作った。「鮭の産卵」，「海がめの産卵」の作品になった。[5] 想像力が豊かで楽しい作品であった。「命の営み」を感じさせてくれる。昨年は「鳩の巣篭もり」の作品を制作したが彼の心の中のイメージには共通するものがあるようだ。

今年の粘土のワークショップもテラコッタで，窯入れ，焼成，窯出しの行程があり，大変な労力と時間が必要であった。多くのボランティアの協力と，焼成され釜出しされる作品の期待で，疲れも忘れる。また心豊かな表現世界は作品制作にサジェッションを与えてくれる。

このワークショップにおいても思う存分粘土を使った。300キログラムの粘土を用意したが，17人で220kgの粘土を使った。創造のエネルギーはすさまじく，あふれるばかりであった。初めて障害者と接するボランティアは，感動を語った。ボランティアもワークショップ参加者も，心一杯楽しむことができた。(図6)

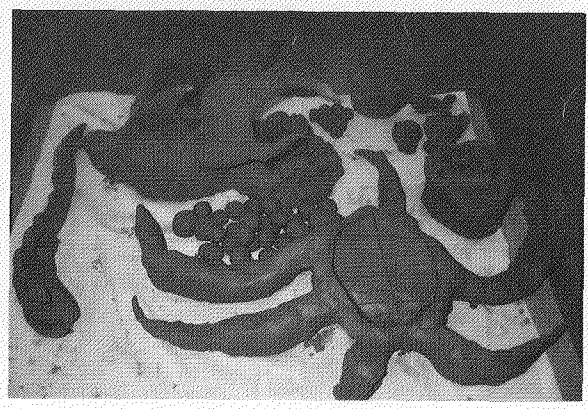

図6　「粘土」のワークショップでの作品

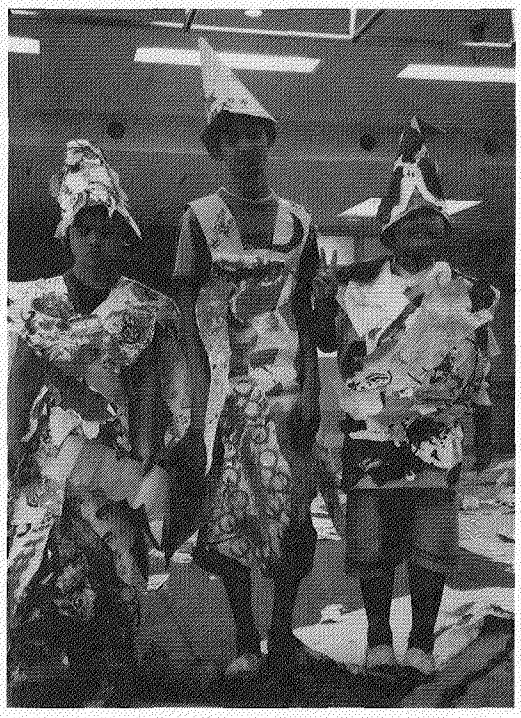

図7　「カラフルみのむし」
ファッションショーを終えて

図8　出石小学校跡地における
作品展案内パンフレット

3.ワークショップⅢ「書」

2001年度の内容を発展させ9，10月と山本氏によりワークショップが展開された。「いつでもどこでも」をモットーとして実践し，成果をあげた。テーマは昨年より引き続き「風のように」として，精力的に3回開催された。

吉備高原小学校，誕生時養護学校，廃校となった出石小学校跡での展覧会会場と3回開催された。

4.ワークショップⅣ「カラフルみのむし」

昨年に引き続き谷本雄太氏にワークショップをお願いし，岡山養護学校で開催した。養護学校のプレイルーム，美術教室で「カラフル蓑虫」とタイトルをつけ，思う存分に絵具で全紙模造紙に着色し，色紙作りを楽しみ，参加者が蓑虫となり，色紙で服作りを行った。思い思いの，色とりどりの紙をちぎり，貼り付け，服が出来上がった。それぞれの個性が現れた服となった。最後に音楽にあわせファッションショーを行った。自分を表現する機会が少ないので最初は照れながらも，音楽にあわせ軽快に踊り，楽しくそれぞれが自分が色紙を貼って作った服を楽しむことができた。(図7)

5.作品展

2002年度に行われた，「染色」，「粘土」，「書道」のワークショップの作品展を，岡山市の中心，廃校になった出石小学校跡で，作品展を開いた。小学生が使っていた教室のロッカーに作品を並べ，一つ一つの作品を鑑賞しやすく展示した。また廊下のロッカーを開けると小作品が覗け，展示に工夫を凝らした展示ができ，ボランティアの協力が大きかった。

障害者にとって，作品が展示されることは誇らしく，自信を持つきっかけともなる。展覧会に訪れた鑑賞者の中には「買い求めたいが」といった声も聞かれ，障害者が作品制作で自信を持つだけでなく，生きがいをもつ。またこの事で自立のきっかけになればと思う。(図8)

Ⅴ．ワークショップの総括

2001年，2002年のワークショップを各種行ってきた。どのワークショップも十分に材料を提供し，心いくまで制作できるようにした。参加者は思いの丈制作し，その制作量は凄まじく，あふれるエネルギーにボランティアたちは圧倒されていた。

このような体験を通し，学ぶことは，ますます日常から遠のき，価値観も多様化している今日，一層このような機会を増やして生きたいと考えている。よきものに触れることの経験は，積み重ねることで心に蓄積され成長の糧となる。これは参加者だけでなく，かかわる一人一人にとても大切なことである。特にボラン

ティアをする学生たちは，社会経験が少なくなっており，障害者と制作を通し関わることでコミュニケーション能力だけでなく，様々な教育の場を知ることにつながる。

今まで行ってきたどのワークショップにおいても，障害のあるなしに関わらず，楽しむ事ができた。難しく思える題材も，楽しく，簡単に製作できるワークショップを心がけた。制作を通し，参加者の表情がだんだん明るくなり，付き添った父兄や，施設の職員も笑顔になる。笑顔は心を解放する。笑顔は人と人を繋ぐ架け橋となる。障害者たちの個性が輝き始めるとき，関わる一人一人も豊かな時間を共有する。このような体験を共有できる実践研究の深化を図りたい。

今年のワークショップでは，障害があっても指導者として立つこと，また，ボランティアに参加した人たちの中から指導者になっていくことが少しずつ実現している。造形活動支援を通し，色々な障害の垣根を越えるバリアフリー社会の到来が近づいていることを実感した。

Ⅵ. これからの課題

障害者の支援活動，特にワークショップを行うには場所，人材，経済がバランスよく揃わなければならない。造形活動を行う事のできる空間，心が開放され癒される制作の場，交通の便が良いところが必要である。また，障害者に寄り添い，障害を受容できる人材の育成が待たれる。また，豊かな材料を提供するために経済の確保，また障害者が使いやすい画材などを研究していくことも必要である。

また障害があることを知られたくない多くの人々がいる現状がある。障害のある人たちの繊細な心を理解をしながら，豊かな成熟した社会の到来を求めたい。

Ⅶ. 終わりに

障害者の造形活動支援を始めたばかりでスタート地点に立った状況である．多くの先輩たちが築いたことの上にささやかな実践活動が加わり，障害のある人たちが制作した作品が，「障害者のアート，作品」と付け加えられずに受け入れられる時を待望している。来年度には，人材養成の講座の開講など検討し，更なる充実を図りたい。

障害ある人も，ない人も芸術を楽しみ，呼吸をするように制作に親しみ，創造活動を通して生きる喜びを味わい，そして生き生きと活動し，人としての尊厳が守られ，芸術文化活動を共に享受できる社会が来てほしいものである。

この活動は，多くのボランティア，ワークショップリーダーを務めてくださったかたがた，日常の仕事を終え，遅くまでワークショップや展覧会の準備をしてくださったハート・アート・岡山の会員諸氏，特に事務局田野智子氏，会計渋谷奈津子氏の大きな支えによるところが大きく，敬意を表する。

参考文献

1）播磨靖夫（2001）「できる！アート」社会福祉法人わたぼうしの会
2）安彦講平，荒川幸生，小林昌廣，稲垣明（2001）「‘癒し’としての自己表現」エイブルアート・ジャパン，ABLE ART BOOKS
3）モーリス・タックマン，キャロル・Sエリエル(1993)「パラレルビジョン」 淡交社
4）西村彰，樋口昌樹編(2000)「アウトサイダー・アート」求龍堂
5）嶋本昭三(2000)「こんなアートスペースあったらいいな」日本障害者芸術文化協会
6）播磨靖夫他（1999）「新しいアートの胎動」トヨタ・エイブルアート，東京セッション講演録，トヨタ自動車，エイブルアート・ジャパン
7）嶋本昭三（2000）障害者アートと著作権，日本障害者芸術文化協会
8）高村光太郎(1967)「美について」筑摩書房

注

(1) ノーマライゼーションはデンマークのハンク・ミケルセン氏より提唱され，ノーマルと，アブノーマルという差別をなくすこと，知的障害者への支援から出発した運動である。

(2) 2001年12月15日，山陽新聞1面「滴1滴」にて障害者の造形美術が評価された。

(3) 2002年度より「ハート・アート・岡山」と名称を変更し，障害者の造形美術活動支援活動を行っている。障害者の，社会的評価，認知を高め，自己表現の機会を設け，芸術の可能性を再発見する。約60名のボランティア組織である。ハート・アート・岡山の名称は本行奎晴氏の命名による。

(4) 2000年12月2・3日「障害ある人たちのアート・サポーター入門講座」を内山下小学校，岡山県立博物館で開催した．藤野忠利氏，はたよしこ氏を講師に，ワークショップを体験した。

(5) 高機能自閉症のM君は高校進学を目指したが，高校より，養護学校を勧められ，養護学校からは普通科高校を勧められている。国語の能力など高く，短歌をよくする。彼の作品集ができないものか検討している。

Title: Plastic art activity support which aimed at independence of disabled person

Hisatoshi UETA　(Faculty of Education ,Okayama University)

Abstract: As for this research, the disabled person had definite aim in life through a disabled person's plastic art activity support, and it aims at that it can become independent. As the means, in order to hold various workshops, the talented people of various fields, such as pictures, sculpture, and calligraphy, are concentrated, plenty of material is offered, and a workshop is held. Deployment of the new disabled person art which is not concerned nothing but can participate with obstacles is aimed at. In order to promote a disabled person's plastic art activity, a volunteer organization is established, and normalization is promoted through plastic art activity.

Keyword: A workshop, Volunteer, Activity of plastic art, Independence of disabled person, Normalization,